ひとり親家庭の声 届け

6/30 朝日

貧困連鎖断つ授業 西成高生が質問状

非正規雇用のシングルマザーをめぐる問題について話す中村優里先生＝16日、大阪府立西成高校

2022 参院選

「シングルマザーへの支援をどう考えていますか？」。参院選の投開票を前に、大阪府立西成高校の1年生（198人）が、主要9党に質問状を送った。同校は、不登校だった生徒らが学び直せる学校として府教育庁に指定され、複雑な家庭事情を抱える生徒も多く在籍する。質問状に込めた、生徒と先生の思いとは――。

16日午前。1年5組の授業で、担任の中村優里先生（28）が問いかけた。

「シングルマザーは、非正規雇用率が高いです。どうするべきかな？」

すぐに、数人の生徒が声をあげた。

「給料を増やす！」

クラスの半数近くの生徒が、母子・父子の一人親家庭だ。

授業は、西成高校が独自に行う「反貧困学習」。「貧困の連鎖を断つ」をミッションに、15年ほど前に始めた。生活保護やマイノリティーの人権などをテーマに、生徒は自分の生活と社会問題を重ね合わせながら学ぶ。最近はシングルマザーについて学んでいた。

シングルマザーの年間就労所得の平均は231万円（2019年、国民生活基礎調査）、離婚した父親から養育費を受給している世帯は24・3％（16年度、厚生労働省の「全国ひとり親世帯等調査」）にとどまる――。

実情を知った生徒からは、「支援制度が不十分だ」という意見が出た。1年生は15～16歳で、参院選で選挙権はない。でも、教員らは、「政党に質問状を出すことも、社会参加の一つの方法だ」と考えた。

■西成高校の1年生がまとめた質問状全文

①シングルマザーの収入は低く、現在の児童扶養手当は不十分で額を増やす必要があると思いますが、どのように思われますか？

②元夫で養育費を払っているのは2割程度とのことですが、養育費を払うような法律や制度をつくる必要があると思いますが、どのように思われますか？

③シングルマザーに限らず、女性の賃金をもっと高くする必要があると思いますが、どう思われますか？

④シングルマザーは非正規率が高く、非正規労働者の賃金をもっと高くする必要があると思いますが、どう思われますか？

⑤母子家庭の子どもが進学できるように返済しなくていい給付型の奨学金制度を拡充する必要があると思いますが、どう思われますか？

⑥企業や職場もシングルマザーが働きやすいような環境を作る必要があると思いますが、どう思われますか？

児童手当増やして 養育費払わせる制度を

ある女子生徒（15）は、両親を思いながら、質問を考えていた。

「シングルマザーの収入は低く、現在の児童扶養手当は不十分。額を増やす必要があると思いますが、どのように思われますか？」

4歳で両親が離婚し、母、姉と3人暮らし。父親からの養育費は年々減り、今は当初の半分以下だと、母から聞いている。

「生活きつい」「我慢して」。そう話す母を見て、ダンス教室や塾をやめた。

母は今、仕事を探して働こうとしている。

「一定の養育費を父親に払ってほしいと思うが、母親が頼んだら、暴力を振るわれるかもしれない。だから、父親ではなく、国からお金をもらう方が安心だ。

現在、児童扶養手当は子ども1人で最大月額4万3070円。2人だと、1万170円が加算される。

「2人目はなぜこんなに少ないの？　安定してお金がもらえるよう、児童扶養手当を増やしてほしい」

ある男子生徒（16）も、自分の境遇を重ねていた。

「養育費を払うような法律や制度をつくる必要があると思いますが、どう思われますか？」

小学生のころに両親が離婚。母はパートで働き、姉と兄も高卒で就職して家計を助けている。養育費のことは聞いていない。でも、父が高級車に乗っている一方で、母やきょうだいが忙しく働いているのを見て、「もらっていないだろうな」と思っている。自分もアルバイトをして、携帯料金を払うつもりだ。

民法では、離婚時に養育費の分担を協議すると定められているが、強制力はない。9割弱が協議離婚で、養育費を調停などで取り決める人はわずかだ。一方、海外では行政機関が養育費を徴収する例もある。

「養育費を必ず払う制度が必要。子どもの目線でも政策を考えてもらえるように、声を上げることが大事だと思った」

反貧困学習のカリキュラムを考える肥下彰男先生（62）は、狙いについて、「自分たちの生活を社会に重ねることで、社会構造の問題に気づき、世の中に働きかける主人公になることだ」と話す。

多くの生徒は、自分が置かれた貧困の状況を、「親の問題」「自分のせい」と内面化してしまう。社会保障制度を学び、その不備が貧困につながるのだと知ることで、自己責任論から抜け出すことができる。「社会を批判的に見る目を持ち、何が必要かを考えて行動できるようになってほしい」

（加藤あず佐）